

母からの手紙

A0BA054

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「母が死んだ。」授業中、担任によって職員室に呼び出された千秋の耳にそれは届いた。受話器越しに父の悲しそうな声が聞こえたが、千秋は悲しまなかつた。千秋は母が余り好きでは無かつた。それは、母は千秋の事よりもすべて仕事を優先し、千秋の事で何かしたことは指で数えるくらいの回数しか無かつた。母の遺体との別れの時が近づいていた時、そんな千秋にある1人の女性が話しかけた……。

5話くらいで終わる短編です。

目次

4話	母からの手紙	12
3話	情報	8
2話	球磨	5
1話	母が死んだ	1

1話 母が死んだ

「母が死んだ。」受話器の向こうから父の声が聞こえた。私、佐竹千秋さたけちあきが聞いたその声はいつもの様な元気のある声ではなく、悲しそうな声だった。

この知らせが入ったのは、1時過ぎから始まった5時間目の授業の時であった。5時間目は体育の授業で、体育館でバスケットボールをしている時、体育館に担任が飛び込んで来たのだ。その時、ちょうど試合の最中で、スリーポイントシュートを3回決め終わり、4回目を入れようとした時だった。職員室に向かい、受話器を教師から受け取り、何事かと思った時、父から母が死んだ知らせを聞いたのだ。私はその後、高校を早退し、姉の美穂みほと共に横須賀市内の病院に向かった。市内の病院の霊安室に入ると、そこには、白い正方形の布が被せられ、今朝、出勤する時の姿とは違った身体が冷たくなっていた母、香苗かなえの姿があった。父の和樹かずきや姉、そして見知らぬ人4人は母の遺体にむせび泣きながら抱きついていたが、私は涙一滴すら流さなかった。

私は母についてよく知らない。そして、私は母が余り好きではない。母についてよく知らない事。それは母の兄弟姉妹、仕事についてもだ。母は身体は強いが、何度も何度も理解不能な入院を繰り返していた。え？何でこれについて知ってるかって？私は見ただからだ。母の仕事が休みの日、母が夕食の準備をしていた時の事だった。母が魚を捌いている時に間違えて包丁で指を切ってしまったのだ。「痛……。」母は落ち着いた様子でそう言うと、ティッシュで指についた血を拭き取った。すると、さつきまで切れていた指がくっついていて、さらに血まで止血していた。とても不思議な光景だった。それを見たのは私が保育園生、いや確か、5歳か6歳の頃だったが、今でも脳裏に焼き付いている。

そして、私は母が余り好きではないと言った訳。それは、母は私よ

りも仕事を優先し、一緒に遊ぶ事も、小学校や中学校の授業参観や運動会、体育祭に来ることも、指で数えるくらいしか無かった。例えば、一緒に遊ぶ事が出来ても、途中で仕事場から電話がかかってきて、母は直ぐに仕事場に向かってしまう。そのため、私の心の中では、母は私よりも仕事を優先する人」と、勝手に決めつけていた。今朝も私が起きた時も、階段から降りてきた私とすれ違い、「おはよう」しか言わず、母は直ぐに出勤して行った。その母が今ここに居るのだ。冷たくなつて。

私は好奇心があつたのか分からないが、母の身体を覆っていた白い布を捲つてしまった。白い布を捲ると、そこには左腕と右足が無く、身体はアザだらけ、顔はススだらけになつていた母の姿があつた。母は薄い紫色のショートヘアで、赤っぽい目をしていたが、亡くなつた母の両目は閉じており、髪の毛はどこどころ焦げていた。姉はその姿をみて驚いていたが、父はその姿を見ても泣いたままだつた。私はその時確信した。「父は何か知っている」と……。しかし、父に訪ねてみて父はただただ泣いているばかりであつた。

ふと私は気づいた。父がいつもの服装では無かつた事を。父はいつも出勤する時はスーツであつたが、今の父は警察官みたいな服装だつた。左胸部分には訳の分からない長方形のワツペンの様な物がついていて、袖には黄色で中くらいの線と同じ色でかなり太い線がそれぞれ1本ずつ引かれていた。父からは警察官ではないと聞いていたので、私は不思議がりながら父の服装を見つめていた。

1時間程して、母は父の車であるシルバーのワンボックスカーに載せられた。私は父の後ろをついて行っている姉の車に乗っていた。多分、母の実家に向かっているのだろう。母の実家は横須賀市の北東部に位置する逗子市にある。私はそこに向かうまでの車の中で何もすることがないので、窓からずっぴい雲が立ち込めてきた海だけをずっと眺めていた。

姉の運転する車に揺られ、30分程が経ったのか分からないが、隣接都市である逗子市にある母の実家に着いた。父の実家は関西の伊丹付近にあるため、父の実家に行ったのは数える程の回数しかないが、母の実家は数えられないほど来た事があった。それは、まだ私と姉が幼い時、母が仕事で私の面倒を見れなかった時などに私と姉を実家に預けていたからだ。中学の時を最後に実家に預けるのは無くなったが、それより後も2ヶ月に1回ほどは行くことはあったが、高校生になってからはめっきりと無くなった。高校生になってから始めて来る母の実家は私は車から降り立つと、広い敷地の中心に佇む家の中に入って行った。

家の中で1番広い和室に向かうと、中央に真っ白な棺桶が置かれていた。和室に入ると直ぐに明日お通夜をすると、父が話してくれたが、周りにいる4人は一体誰なんだろう。全員喪服を着ている。1人は栗毛色の髪をしてなんかバネのようなアホ毛がてっぺんについているよく分からない女性。2人目は、ロングの黒髪を三つ編みにして右肩から垂らしている女性。3人目、茶髪でセミロングの女性。4人目を見た時、アレはないと思った。中二病？なのか、眼帯をしている緑と黒の中間の髪をしている女性だった。百歩譲って髪の色は許そう。私の髪だって母の遺伝子で薄い紫色だからだ。しかし、あの眼帯は無い。「こんな場で眼帯なんて気が狂ってるんじゃないのかな？通常、眼帯は目の病気なの時につけるが、アレは・・・、趣味かキラ作りだ・・・。何故かって？病院で眼帯取っていたからだ。しかも、あの女性達に「眼帯くらいとりなよー。」とか言われてるし・・・。やっぱりあの眼帯はキラ作りか・・・。でもそしたら喪服なんて着ないぞ？じゃあこの家の子孫かな？」そう思いながらその人達の横を通ると

「あ、君。もしかして、多m・・・、香苗の娘の千秋ちゃんクマ？」

と、「クマ」という語尾がついた声が背後から聞こえた。「語尾が

「クマ」とか……。キ○ガイか、それともキャラ作りか……。」「そう思いながら私が振り返ると、母と私の名前を呼んだのはさつき、「キチ○イじゃないのか?」と、こっそりと考えていた4人のうちの1人である栗毛色の髪をしてなんかバネのようなアホ毛がてっぺんについているよく分からない女性だった。

2話

球磨

「あ、君。もしかして、多m・・・、香苗の娘の千秋ちゃんクマ？」
「あ・・・はい。そうですが・・・。」

私がそう言うと、話しかけた女性は「やっぱり多磨の娘だクマ。」とか呟いている時のような小さな声で言っていた。「多磨」それが職場での母の呼び名のようなようだ。私は母の職業を知らなかったのも、興味半分で訪ねてみた。

「え？知らなかったクマか？まーったく・・・。多磨から聞いたけど、本当に知らないとは・・・。」

その女性は困り顔を見ると、特徴的な頭をかき始めた。しかし、語尾が「クマ」はないだろう。語尾が「です」とか、「なのです」とか・・・。そう言うのはまだいいが、「クマ」はどう考えてもないだろう。「クマ」は。そう言えば、母はたまに寝ぼけてる時や驚いた時などには「ニヤ」の語尾をつけていた。私も母と同じ様に驚いたりした時には「ニヤ」と言ってしまったり、語尾に「ニヤ」をつけてしまったりしていた。まあ、元々母は猫っぽい性格だし、仕方ないと思う。が、何故私にも遺伝しているのかが分からない。だって、姉は語尾が無いし、髪の毛の色も父と同じダークブラウンだ。おっと。今は話しかけてくる相手の名前を知らない。とりあえず、女性に訪ねてみよう。

どうやら名前は語尾と同じ「球磨」らしい。「球磨は球磨型軽巡の「球磨」だクマ。」と言っていたからだ。「くまがたけいじゅん？」とはなんだろう。新たな職業？名字？ケーキ屋？新型の電車？とにかく後でググってみよう。しかし、なぜ球磨さんとやらは私の事をなぜ知ってるのだろうか。

「そうだったクマ。多m・・・、香苗から千秋ちゃんへの手紙を預かっていたんだったクマ。ちよつと待つクマよ。」

そう言いながら球磨さんは部屋の隅に置かれている自分のバックの中を探し始めた。しばらくすると、台所から祖母が私が呼ぶ声が聞

こえたので、私は手紙を探している球磨さんに「すみません。祖母が呼んでいるので。」と言い、祖母のいる台所に向かった。祖母は姉と共に夕食を作っていた。祖父と父は親戚達に連絡をしているのか、台所と隣の居間には居なかった。

夕食を作り終わると、直ぐに夕食となった。食卓には祖父母、父、姉、そして、キ○ガイ？4人組がいた。（「何故コイツらが居るんだ……。コイツらは母の何だ!？」）私はそう思いながら、夕食を食べていた。夕食中、父や祖父母はこの4人について知っていたのか、話をしていた。話の内容は、「大湊なんちゃらののわり？が来る」とか、母の葬式に来る人達の話らしい。しかし、私の興味のある話では無かった。余り興味が出てこなかったし、母の事をもう1度父に聞こうとしても話が途切れる事が無かったため、聞く事が出来なかった。話の途中で母の話題を出すのもいいが、私は、母の真相が知るのが恐ろしくて、その会話に割り込む勇気が無かった。

夕食を食べ終わっても、明日のお通夜の準備があるため、私を除く全員は休む暇もなく直ぐに準備に取り掛かり始めた。私は明日のみ学校に登校し、明後日から2日間忌引で学校を休むこととなり、私だけお通夜の準備ではなく、明日の授業の準備を始めた。教科書ノート類は早退する前に自宅から持ってきた姉が持ってきてくれていた。教科書ノート類はよく整理して部屋に置いておいたのが良かったのか、学校で使う全ての教科書が母の実家に持ってきてあった。そのため、直ぐに明日の授業の準備が終わり、しかも、誰も明日のお通夜の準備が終わってなかった。私は直ぐに湯船に湯を入れ、入浴し始めた。

入浴が終わり、直ぐに就寝となった時、私は直ぐにスマホを手に取り、アラームをセットした。その後、検索サイトを開き、球磨さんが言っていた事を調べ始めた。慣れない手つきで、くまがたけいじゅん”フリック入力をし、検索結果一覧を見た。

「球磨型軽巡洋艦・・・。軍艦ね・・・。基準排水量5100トン・・・、公式5500トン・・・。同型艦は多磨、北上、大井、木曾か・・・。うーん・・・。よく分からないわ・・・。」

出てきたのは全て軍艦についての記事。自分達を軍艦だと思ってるなんて・・・。やっぱりあの人たちはキチ○イじゃないのか？と、本当に思い始めてしまった。が、私は小学校の頃から教わっていた事があった。それは、今、世界中は戦争をしている事だった。地球上を侵略しようとしている謎の生物、深海棲艦と人類が艦娘という女性達で戦っていることだった。私はイマイチ戦争をしているという実感は無かった。日本国内は平和だし、空襲があったことや、強襲があった事が無いし、聞いたこともない。ニュースは「総理大臣が海外の首相と会談をした」とか、「離婚が原因で自爆した事件があった」とか、戦争には関係ない情報ばかりが流れていた。さらに、公開されている艦娘の情報も少なく、私は艦娘に対してのイメージがおかしい事になっていた。艦娘Ⅱムキムキゴリラみたいな女性”というどう見てもおかしいイメージだ。世間にも艦娘Ⅱムキムキゴリラみたいな女性”という写真もないのに、こう考えるのはおかしい常識が定着していた。そのため、ネット辞典には(軍艦)と(艦娘)という2つの記事があったが、(軍艦)の記事を見た。しかし、私は「どうせムキムキゴリラみたいな女性の写真を見るんだろうな・・・。」と思いながら、スマホ画面を消し、直ぐに枕元に投げた後、布団に潜り込み、眠りについた。

3話

情報

「今、日本を合わせた世界の国々は戦争をしています。それは深海棲艦という謎の生物に地球を侵略されそうになったからです。イーゼス艦などのレーダー類は認識出来ず、ミサイルや核兵器などの現代兵器すら効かないこの生物に対処する為に人類は・・・」

先生が話す声が教室に響く。母が死んで2日目。私は今学校で授業を受けている。科目は現代社会だった。現代社会は今日の最後の授業だった。私はノートも取り終わり、クソつままない授業を聞くのが辛かったので、紙に落書きをしていた。

「今、日本も合わせた世界各国は戦争をしています。それは深海棲艦という謎の生物に地球を侵略されそうになったからです。現代兵器すら効かないこの生物に対処する為に・・・」

先生が話す声が教室に響く。母が死んで2日目。私は今学校で授業を受けている。科目は現代社会だった。現代社会は今日の最後の授業だった。私はノートも取り終わり、クソつままない授業を聞くのが辛かったので、紙に落書きをしていた。

「これから皆さんに、艦娘の姿の写真を見せます。ちょうど昨日、防衛省が艦娘達の写真が一般公開されたんですよ。」

先生のその一言を聞いた時、その写真に興味を持たなかった。ちょうどその時、しばらく落書きをしていた私は、黒板の上にある時計を見るため少しの間、落書きをしていた手を止め、黒板の方を見た。先生は黒板に艦娘の写真を貼り出していく。少しの間止めようとした手は、授業が終わるまで動くことは無かった。私は見てしまった。艦娘の本当の姿を・・・。

写真に写っているのは海上を駆け抜ける1人の女性だった。女性の表情は険しく、背中につけている装置に付いている砲から砲撃して

いる写真だった。

「この艦娘さんは、球磨型軽巡洋艦という一種の軍艦の『球磨』と言います。」

先生は続けて言う。私は唾然としてその写真を見ていた。そう。そこには昨日、母の実家にいたあの栗毛色の髪をしてアホ毛がてつぺんについていて、語尾が『クマ』になっていた女性と瓜二つの女性が写っていた……。

私は母の実家に着くと直ぐに教科書ノート類が入ったりユツクを就寝している部屋に投げ捨て、制服の上着からスマホを取り出した。画面をつけると直ぐに検索サイトを開き、『球磨型軽巡球磨』と、また調べ、辞典サイトに出ている『球磨型軽巡洋艦(軍艦)』と『球磨型軽巡洋艦(艦娘)』の記事を出した。私は迷わず(軍艦)の方ではなく、(艦娘)の方の記事をクリックした。すると……、

学校で先生が黒板に貼っていた写真と昨日話しかけられた女性に瓜二つの女性の写真があった。私は「もしかして……!?!」と思いつながら『同型艦』のスペースに書かれていた『木曾』をクリックした。すると、やはり、昨日見た眼帯をしている緑と黒の中間の髪をしている女性であった。『北上』と『大井』の姿も昨日見た女性達と全く同じ。

私は「まさか……!?!」と思いつながら、最後に閲覧しようとした『多磨』のページを開いた。すると……

そこには、昨日死んだ母と瓜二つの女性の写真があった。私は「これだ……。母は艦娘だったのか……。」と仮定を立てて記事を読み始めた。記事を読めば読むほど私は母が艦娘であったかもしれないという仮定は確信に変わる。それは、語尾であった。記事に書かれている情報によると、球磨型の1番艦、物知りになるとネームシップと呼ばれるに彼女、*「球磨」*の語尾は*「クマ」*がつくのが特徴だという。2番艦*「多磨」*の語尾は……

「ニヤ」

だった。しかも、艦娘の記事を見ると、*「艦娘は、「提督」や「司令官」と呼ばれる海上自衛官によって指揮されている。」*という記事が書いてあった。私は直ぐに別のページに検索サイトを開き、直ぐに*「海上自衛隊 冬服」*と入力した。画像を見ると、昨日、病院の霊安室で見た父の制服と同じであった。さらに、父の階級も気になったので、自衛隊のホームページで調べてみた。すると、父の階級は*「海将補」*、解りやすく言えば*「少将」*と同じくらいであった。私はこれを見て、母は*「多磨」*という名の艦娘、父は*「提督・司令官」*だと確信した。

私は母が艦娘、父が提督・司令官だと確信した後、父や姉達が居る居間に向かった。その後、お通夜が始まった。居間に着いた時に父に母が艦娘だった事を聞こうと思ったが、親戚や友人達と話していたので、お通夜が終わった後に私は父に尋ねようとした。

夜10時が過ぎた。その時には既に通夜が終了しており、母の実家の居間には私達一家と祖父母、そして球磨型の4人が集合していた。ちようどいいタイミングだった子で、私は父に母について詳しく聞こうしたが、その直前、タイミングが良いのか悪いのかイマイチ分からないが、球磨さんが私を呼んだ。

「ちよつといいクマ？」

私はふと、球磨さんの右手を見ると、そこには1つの封筒が握られていた。

4話 母からの手紙

お通夜が終わったので、私は父に母について詳しく聞こうしたが、その直前に球磨さんが私を呼んだ。

「ちよつといいクマ？」

私はふと、球磨さんの右手を見ると、そこには1つの封筒が握られていた。

球磨さんは私を縁台に連れていくと、端に座り、私にも座るように促した。私は球磨さんに言われた様に座ると、球磨さんは右手に握っていた封筒を私に差し出した。

「香苗からの手紙よ。貴女宛の。」

封筒を私に差し出した時の球磨さんは、真面目な表情になっていて、しかも語尾に「クマ」をつけていなくなっていた。

私は球磨さんから封筒を受け取ると、封をしている猫のシールを剥がし、中から手紙を3枚目出し、開くと、そこには母の特徴的な丸い文字が書かれた文書が書かれていた。ボールペンで書いたのか、文字はすべて濃い黒色だった。

「読んでみなさい。」

と、手紙をちらつと見た後、球磨さんの顔を見た時に言われた。それを聞いた私はコクリと頷き、手紙を読み始めた。

〃千秋へ〃

元気になっていますか？この手紙を貴女が読んでいるということは、私が戦死したという事です。千秋には黙っていました。私の職業は艦娘です。黙っていた事に怒りを感じているかも知れませんが、それは仕方がない事です。艦娘だと言うことは、軍規や法律により、艦娘であった本人が死ぬまで一切口外不可能です。最近はずいぶん艦娘についての情報が公開されてきているので、もしかしたらもう知っているかも知れません。ですが、私は多分、情報公開前か、公開直後に死んでいると思います。貴女は知らないかと思いますが、この手紙は半

年に1回は書き直しています。それは、私を余り好きではない貴女に知ってほしい事があったからです。”

1枚目はそこで終わっていたが、私は直ぐに1枚目を3枚目の後ろに入れ替え、2枚目を読み始めた。

“私は艦娘を大学卒業後から始めました。その頃は、深海棲艦が現れた直後であったので、日本国内の食料が不足し、情勢がかなり苦しかった頃でした。それと同時期に艦娘という対抗手段が発見されました。私は艦娘の適性がある事から無理矢理艦娘になり、大海原を駆け抜け、日本国内や、国内の物資供給に必要な貨物船などに攻撃してくる深海棲艦から守っていました。私が横須賀基地の司令官と結婚した時は深海棲艦の活動も穏やかになってきたので、艦娘を辞めようと思いました。しかし、上層部が許してくれませんでした。それは、私の練度が原因でした。その頃の私の練度は東日本地区最大。上層部が私を手放したくないのは馬鹿でもわかる程でした。何度か辞めようと思いましたが、上層部が許しを出してくれませんでした。そして、貴女や姉の美穂を産んだ時も、産休を取ろうとしました。提督、そして夫である和樹は上層部にバレないようにこっそり産休を許可しましたが、誰かがバラしたのか、直ぐに海上自衛隊上層部にバレて、和樹と私は5割の減給処分や2週間の謹慎処分を受けました。上層部にそれを訴えると「兵器に休みなど必要ない」と言われました。奴らは我々艦娘を上層階級に行く為に使う只の駒と認識していたのです。貴女が私を好きでなくなったのは、すべて上層部のせいです。私は貴女を世話する為にこっそり基地を抜け出そうとしました。しかし、直ぐに見つかり、連れ戻されました。私が死んだのは、上層部に艦娘の有り難さを知って欲しかったからです。それは、腐った上層部の間違った事で戦力が減っていく事を実感して欲しかったからです。あと、攻撃してくるからといって決して深海棲艦を恨まないようにしてください。友好関係を築こうとする深海棲艦もいるので。それに彼らも私達を殺らないと自分達が殺られてしまう。つまり、彼

らも生きるのに必死なのですから。”

2枚目はそこで終わっていた。私は最後の3枚目を見ると、そこには……。

〃最後に。

貴女が私を嫌いになっても、

私は貴女が大好きだよ。

千秋。

「香苗より」

それだけが書いてあった。その文章はどこどころインクが滲んでいて、母が泣きながら書いていたのが誰から見ても分かるようだった。最後の文書を読んでも、私は泣かなかつた。手紙だけでは相手に全ての気持ちが伝わる訳では無いし、本当の気持ちが書いてあるかも分からない。つまり、手紙だけでは信じられないのだ。

「あと、これも預かってた。死ぬ前に渡してくれたやつよ。」

それを見ていた球磨さんは私にある小さな箱をを渡してくれた。

「それは……?」

「香苗から貴女への誕生日プレゼント。」

私はその箱を開けると、中にはミュージックプレイヤーが入っていた。そのミュージックプレイヤーは私の欲しかった物だった。しかも、色も機種も欲しかった物とピタリと一致する。その瞬間から私の目の前が歪み始めていた。私は思い出したのだ。母が私に対して優しくしていた事を。私が熱を出して学校を休んだ時、母は時間が無い中、お粥を作ってくれたり、学校で嫌なことがあった時は私が落ち着くまで抱いてくれたりしてくれた。私の誕生日を覚えててくれていて、さらに、居間で「欲しいな……。」と呟いていたミュージックプ

レーヤーを買ってくれていたのだ。母は私の事がとても大好きだった。その事を私は忘れてしまっていて、さらに、否定してしまった。ごめんなさい。お母さん……。ごめんなさい……。ごめんなさい！！」

私はその事を忘れ、しかも優しくできなかった母に対し、冷たくしていた私が許せなく、その場に泣き崩れた……。